

NO-MA ニュースレター

2011.9 / VOL.11

ボードレス・アートミュージアム NO-MA ニュースレター

New!! NO-MAニュースレターが「野間の間」として生まれ変わりました!

展覧会レポート 鮎万里絵展

Topic of NO-MA 岩手県の山口少年のインタビュー

ABCColumn アール・フリユットを巡るコラム VOL.1

地域インタビュー あの一ひとの近江八幡スタイル 尾賀商店 野垣さん



鮎万里絵展
 るるるるるる
 縷々累々、紙の上の私の風景
 2011年6月18日(土)～8月21日(日)
 ボーダレス・アートミュージアム
 NO-MA (旧野間邸)
 監修:保坂健二郎
 (東京国立近代美術館 研究員)
 【主催】
 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
 社会福祉法人 滋賀県社会福祉事業団
 【後援】
 NPO法人はれたりもつたり
 【協力】
 近江八幡観光物産協会、特定非営利活動法人しみんふくし滋賀、八幡酒蔵工房

展覧会レポート

Exhibition Report

文:横井悠 (鮎万里絵展担当)



↑2階の展示風景



←鮎万里絵さんによるトークイベント(夕暮れNO-MA)が行われた。2011.8.5

鮎万里絵(すずまみりえ)は1979年長野県に生まれた。当初は、挿絵風のイラストを描いていたが、2007年ごろから、現在見られるような作品を制作しはじめた。自身の心の中にある衝動に対して、包み隠さず向き合い描く彼女の作品は、2010年パリで開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展においてもヨーロッパの観客の多くを魅了した。

彼女は、紙とマーカーペンというごくシンプルで身近な画材を用い、乳房、鋏、性器など大胆とも言えるモチーフを描く。またそれらの間を埋め尽くすように、微細なドットで構成してゆき、それらは、まるで目の中で蠢くような効果を生み出して、観る者の心を激しく揺さぶってゆく。多方面から注目されたこの企画は、彼女によるこれまでの表現活動を包括的な形で体感できる、日本で最初の大きな個展となった。



「ニンゲンセイナイニンゲン」 2010年制作 紙に油性ペン

「自分の中に封印している問題点を突っつかれた気がしました」「細かな線の動きにひきつけられた。荒々しいようでいて猥雑じゃない。この不思議な感じ。抑制された激しさ」近くで見ると、赤、紫、緑など、色だと思っていた所が丸や曲線を色つきで描かれているのに気づくと、全体の何を(乳房、鋏、性器描いたかよりも)どのような線や丸でつくられているかに興味が出てきた」…、本展の意図は観ていただいた方々の多くの感想が物語っていた。実際の作品に触れることでこそ感じられるエネルギーを会場全体で体感していただける、そんな展覧会となった。

ノマ Topic of NO-MA トピ

ぼくを虜にした絵師 鮎万里絵の世界

岩手県の山口少年のインタビュー

一僕、今この展覧会に行っておかないと、大人になってから後悔しそうな気がする。普段、滅多に自分の要求を表すことはないという1人の少年が、1000km離れた岩手からNO-MAまでやって来た。

山口秀君は、岩手の県北に位置する一戸町に暮らす中学3年生。「純朴」という言葉がよく似合う野球少年だ。今回彼は、鮎万里絵展を見るというその目的のために、母親と2人、遠路滋賀を訪れた。

山口少年が鮎作品と出会ったのは、昨年放送された「日曜美術館」だそう。アール・ブリュット・ジャポネ展が特集されたその回は、他の出展作家の作品も多く紹介された。

一鮎万里絵さんの絵が、まず目に入りました。とにかくすごいと思いました。展覧会があると聞いて、ぜひ実物を見てみたいと思いました。

一すごい。ここ、塗っているだけでなく、中にまた細かい模

様がある… NO-MAに入り、鮎作品とご対面。母親に話しかけると、独り言ともつかない調子で絵の感想が漏れ出る。さらに何枚か続けて見ていくうちに笑顔が大きくなる。

一なんで、何種類もの違うハサミが描いてあるんだろう… 鮎作品の代表的なモチーフの1つにハサミがあるが、彼の言葉を基に改めて絵を見ると、たしかに和ハサミ、図工ハサミ、裁ちハサミと様々な種類のハサミが描かれている。柄の図柄が様々あることも興味深いようだ。母親曰く、彼は無類の文房具好きでもあるそう。行きつ戻りつ、時間をかけて鑑賞する。

一ボールペンの絵の時は、点々の部分がほとんどない… 嬉しそうに、しかし決してしゃぐことなく自分の気づきを言葉にする。一緒に見ていた母親が「おっぱいとか性器とかも描かれているけど、全然いやらしさを感じない作品ですね」と話す脇で、彼も

こっくりとうなずいていた。2階の展示も見て1階に戻った時には1時間半が経過していた。

作品を鑑賞する目はどのようにして養われたのだろうか。そもそも彼自身、絵を描くことや美術の時間は好きなのだろうか。

一美術の時間は好きです。絵を描くのは、実物を見ながら描くのが好きです。絵を描くより、ものを作ることが小さい頃から好きでした。

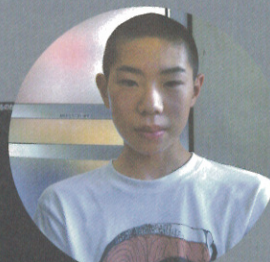
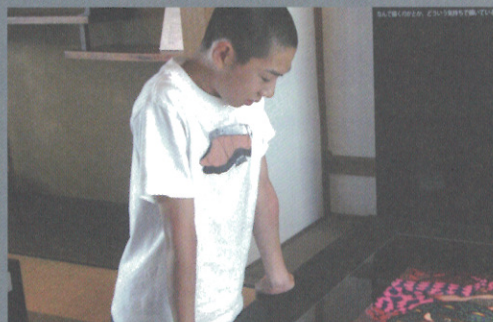
美術館にもよく行くのだろうか。一行ったことのある美術館は、十和田市現代美術館だけです。すべてがすごかったです。他には「きらら」です。彼が言う「きらら」とは、岩手で毎年2月に開かれている知的障害

のある人たちを中心とした公募展「いわて・きららアート・コレクション」のことである。この展覧会を楽しみに見に行っているそうだ。

鑑賞後、実際の作品を見た感想を聞いてみた。

一すごくデザインがいいと思いました。それと、ボールペンの作品と、ペンの作品があって、その違いも見られて良かったです。

今回、山口少年の鑑賞に立ち会い、とてもフラットに作品と向き合っている印象を受けると同時に、「ものをつくる」人に対する尊敬の念がひしひしと伝わってきた。



翌日、山口少年は野球少年らしく高校野球を観に甲子園へ向かっていった。

文:田端一恵
 (アール・ブリュットを巡るトークシリーズ担当)

私があなたによって
いかに変えられたかを
伝えること

斎藤環さんの講演より



アールブリュットを巡る
トークシリーズ vol.1

ゲスト：斎藤環(精神科医)
日時：2011年7月9日(土) 14:30~16:30
会場：ヴォーリス平和礼拝堂
(近江兄弟社学園 本館5F)

文：アサダワタル
アール・ブリュットを巡るトークシリーズ
ディレクター

7月9日に開催されたトークシリーズ第2弾。アール・ブリュット(以下「AB」と略記)という概念が生まれた歴史的経緯、定義付けをはじめ、AB作品の海外との現状比較、AB作品と関わる上での基本的な心構えについてなど、幅広くお話を伺った。僕がとりわけ重要だと感じた点は、ABにおける批評についての彼の考え方だ。彼は以前からAB作品においては「批評ではなく、関係せよ」と説いてきた。そしてその作品と関係することにより「私」というプログラムが書き換えられるリスクを受け入れる覚悟が必要」とも。

ちなみに僕は、美術分野と福祉・医療分野との狭間で浮遊するABという不思議な存在を、まだ見ぬ他者に伝えることを命題に、編集者のようなポジションを担っている。展覧会を開催する立場でも、多くの作家が生活する施設や病院の職員という立場でもない僕にとつて、作家たちの「作品」と彼ら彼女らの「生活」という二つの軸が交わるグレイゾーンと関係を取り持つこととは一体どういうことか、ここ数年考え続けている。そんな中、斎藤氏が発した「私」というプログラムの書き換え問題を考えるうちに、僕は突如として政治社会学者の栗原彬氏の「存在の現れ」という言葉を思い出した。

彼の著作では、あらゆる政治的、経済的、社会的、文化的なシステムから解放された一人一人の人間の矜持を現す運動、すなわち「存在の現れ」が語られている。このことに意識的になる過程で、あらゆる問題における当事者と非当事者、加害者と被害者の関係性が相互転倒をおこしてゆく。その時はじめて、他者の気持ちや意思を無闇に代弁することについてふと立ち止まる。

AB作品において「批評をせずに関係する」ということは、まさしく、作家たちの思いを代弁することではなく、私たちの存在が彼ら彼女らの作品や生活を通していかに変えられてしまったか、その報告を含めた行動までを指すのではないか。質疑応答の時間で斎藤氏は、ヘンリー・ダーガーとの出会いのエピソードを語ってくれた。彼自身が「戦間的少女の精神分析」という一冊の本を書き上げるまでに影響を及ぼしたその出会いの報告を聞いて、ようやく彼の冷静な講演の中にみえぬ熱い訴えが観客の心に響いたのではないか。

築150年の古民家を活用した
Shop&Gallery「尾賀商店」

ふわりと切り盛りする影の立役者にお店のこと、NO-MAのこと、そして、まちのことをうかがった

編：西川賢司 (NO-MA地域交流担当)

尾賀商店

滋賀県近江八幡市永原町中12
☎&FAX 0748 (32) 5567
Open 11~18時/木・金休
<http://oga-showten.com/>



地域インタビュー
Oga Showten local interview
尾賀商店オーナー
野垣洋子氏

尾賀商店を始めたのは2007年11月。この場所はずっと父親の実家で、私の叔父の家。戦前までは砂糖の卸をやっていて、戦後は履物の卸をやっていました。20年ぐらい前には商売もやめていて、叔母が1人で住んでいました。私は別の場所で専業主婦をしていましたが、この家を譲ってもらうことになり、維持していくための方策を探ったのです。

最初はお店をするなんてまったく考えていませんでしたが、自分でするよりも誰かがするのを手助けしようと思ひ、何人かの人に声をかけ始めたんです。一番最初に反応してくださった人が、銅で照明を作っている作家さんとはんこ職人さんで、個展や作品販売などのアイデアが生まれました。喫茶とともにギャラリーもある。この店が文化的な要素を持ち得たのは、こういった作家さん達との出会いが大きかったですね。知り合いが知り合いを呼びながら、現在はハンコと書のショップ、ギャラリー、鉄の工房、野菜と古代米のごはん屋さん、貸しスペースの5店舗に至っています。続けていくうちに徐々に尾賀商店のイメージのようなものが培われていき、なんとかいい感じで続けていますね。

お店をしていると、何が嬉しいかって、これまで絶対に会わなかったであろう人たちと出会うことができるんですよ。そして色々お話をする中で、「素敵な場所ですね」って褒めていただいたり。私が気をつけていることといえば、自分を主張しすぎず、集まってくる人たちが自由に思うようにやってもらうことですね。

子どもの頃からずっと知っているこの家。私はこの家がこれまで残ってきたという事実にとっても惹かれていて、だからこれからもこの家を何かしらの方法で残していきたい。住みながら残すのもいいけど、世代の変化を受け入れながら、こういったお店という形でもこの家の遺思や歴史を受け継げると思っています。そういえば、NO-MAも元々は野間さんの家ですよ。実は私、あそこに幼少時代住んでいたことがあ

るんです。それが今は美術館。2004年にNO-MAがオープンした時は、「自分が生まれ育ったところに美術館？」って正直驚きでしたね(笑)。私はNO-MAが古い家としての様子を残している感じがとても好きです。特に2階のライブラリーの間など、居心地がいいですよ。私は昔から知らない人の家に入るのが大好きで、NO-MAは堂々と人の家に入っていき感覚がとっても嬉しい。家的な空間って、「ここにどんな人が、どんな暮らしをしていたのだろうか？」って、想像するだけでとてもワクワクするんです。

近江八幡のまちの空気をもっと感じてもらえるような宿泊施設が、この界限にできるといいなと思っています。このまちの空気に馴染みながら、こういった活動を自然な形でこれからもやっていきたいです。

あのひとの
近江八幡
スタイル

子ども時代の野垣さん一家
(NO-MA玄関前にて)



